

2023年6月18日（日）主日朝礼拝説教

『パウロは起き上がって』 井上隆晶牧師
使徒言行録 14 章 19～23 節、ヨハネ福音書 4 章 31～34 節

① 【伝道は神がなさるもの】

キリスト教が世界宗教になったのはパウロの影響が大きいと思います。パウロは人生で三回伝道旅行をしました。今のキプロス、シリア、トルコ、ギリシャ、イタリアの国です。それは当時のローマ帝国領内であり、彼はローマの市民権をもっていましたから、安全で自由な旅が出来たからです。使徒言行録 13 章に第一回目の伝道旅行の始まりの記事が書かれています。彼らがシリアのアンティオキアの教会で礼拝し、断食していると聖霊が告げます。「バルナバとサウロを私のために選び出さない。私が前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。」

（使徒 13：2）これを讀むと、伝道というのは人間が「～をしよう」というものではなくて、神が「前もってこの人に～をさせようと決めておいた仕事」をさせられることだという事が分かります。聖霊が主人であって私たちは道具です。「あなたは～の人の所へ行って語れ」と言われるのです。だから時には「聖霊から禁じられた」（使徒 16：6、7）という記事もできます。伝道にまず必要なのは祈りです。ここでも祈って断食していたら呼ばれたのです。道具は従順でなければなりません。我があつたらだめです。「行け！」といわれて、「嫌です」と言わないように、従順さ、勇氣、献身の思いを持つためには聖霊に満たなければなりません。だからこそ祈って聖霊に満たされることが伝道の第一なのです。

② 【迫害されても、なぜ伝道するのか】

彼らは今のトルコの国のアンティオキア、イコニオン、リストラという町に行って伝道しました。どの町でも大勢の人が信仰に入りましたが、信じない人も大勢いました。神の言葉を聞くことによって、人は二つに分裂したのです。これは仕方がない事です。伝道はじょうずに話すことが重要なではありません。事実を事実として話すことです。いくら感動する話をして、信じない人は信じません。人間の話術で人を信仰に導くことは出来ないのです。リストラの町では、生まれつき足の不自由な男を癒しましたが、ユダヤ人たちに迫害され、パウロは石を投げつけられて迫害されました。「死んでしまったものと思って、町の外へ引きずり出した。しかし、弟子たちが周りを取り囲むと、パウロは起き上がって町に入ってしまった。」（使徒 14：19～20）と書かれています。彼は死ぬような目に遭い、傷を負いながらも、翌日には他の町に行ってもう福音を伝えています。何事もなかったかのようにです。なぜ、こんなことが出来るのでしょうか。

●先日あるクリスチャンの人とお話をしました。その人は彼が出来たのですが、他の宗教の人でした。彼は彼女が教会に行くのをあまり嬉しく思いません。そこ

で彼女は次第に教会から足が遠き、今は行かなくなったというのです。私は統一協会から脱会して普通の教会に通い始めたころ、当時付き合っていた彼女（今の妻）に「教会に行こう」と誘いましたが、なかなか信用してくれませんでした。歩いていてもだんだん距離ができてしまい、行きたくなさそうなのです。そこで神様に祈り考えました。「私がこのまま彼女に合わせて教会に行かなくなれば、私も彼女も減じるだろう。でも分かれて私だけでも教会に行けば、私は救われ、彼女の救いの為にも祈れるだろう。」そう思って分かれる決断をしたのです。そうしたら彼女は逆に教会についてきてくれました。本当に人を愛するなら、その人の救いを考えるべきだと思います。

信仰したら楽になる、自分の願いが適うと思って信仰する人は信仰は続かないでしょう。なぜなら迫害されることもあり、自分の願いがきかれないこともあり、重荷を負わされることもあるからです。12 弟子たちがそうでした。彼らは最初、イエス様について行ったら、生活が楽になる、自分の願いがかなうと思ってついて行ったのです。でもイエス様の死後、再び集められた彼らは、そのような偶像を捨てたのです。イエス様がまことの神だからこそついて行ったのです。真理だからこそ、道だからこそ、命だからこそついて行ったのです。パウロにとって福音（キリスト）が大きく、自分は小さくなっていたのです。このリストラの町にテモテという若い青年がいました。そして石を投げられても福音を伝えるパウロを見て、神に自分の生涯を献げる伝道者になってゆくのです。信仰は口先だけで伝わるものではなく、体を張らなければ伝わりません。自分が神を本気で信じているかどうか、にかかっているように思います。神を畏れて真剣に生きる姿が伝道なのです。

③【私たちが満たすもの食べ物=伝道】

弟子たちがイエス様に「先生、食事をどうぞ」といった時、主は「わたしにはあなたのための知らない食べ物がある。わたしの食べ物とは、わたしをお遣わしになった方の御心を行い、その業を成し遂げることである。」（ヨハネ 4：32、34）といわれました。イエス様の言われた「あなたのための知らない食べ物」とは、福音を伝えることなのです。イエス様はここでサマリアの婦人がイエス様を信じるようになったこと、神に立ち帰ったことがとても嬉しいのです。そのことでイエス様の心は満たされ、満足しているのです。人が救われてゆくときほど、心が満たされることはありません。人間は自分の為に生きようとするとき死に、神の為、他者の為に生きようとする時に、生かされるのです。それはイエス様もおっしゃられたことです。「自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。」（マルコ 8：35）

イスラエルの国に、ガリラヤ湖と死海という二つの湖があります。ガリラヤ湖は琴の形をしていて周囲は豊かな緑に囲まれています。このガリラヤ湖から豊かな

水がヨルダン川に流れ込み、死海へとつながっています。死海は海拔マイナス 400 メートルの位置にあり、ヨルダン川の水が流れ込んでも出て行かないため、濃い塩分の為死の海となっています。自分を与えてゆく人は豊かな命を得ますが、もらうだけで与えることをしないと死海のようになるということを教えているのです。このように人の生き方というのは、自分の為に生きるのではなく、神に仕え、他者に仕え、神と他者のために自分を献げてゆく生き方をこそしなければなりません。そういう人が本当に生きるのであり、命も輝くのです。

●私の友人の牧師で S という人がいました。彼はもう天に召されましたが、面白い男で 100 キロを走るウルトラマラソンをしていました。でもただ走るのではありません。T シャツに十字架のロゴをつけて伝道しながら走るのです。100 キロほどになると若い人から脱落してゆき、高齢者ほど走り続けるそうです。彼は生まれた時から体が弱くて、小学校 1 年から 4 年までは毎日注射を打っていました。31 歳で片方の腎臓がついに機能しなくなります。するともう片方の腎臓が二倍頑張らなくて働かねばならないので、体に負担をかけないように生きなければならなくなりました。49 歳の時、残りの人生を思い、自分の苦手なスポーツを試みようと思って歩き出し、少しずつ距離を伸ばし、ウルトラマラソンをするまでになったそうです。過激なマラソンに耐えられなくて、動いている腎臓に負担がかかるだろうと覚悟していたのですが、何と不思議なことに、ほとんど死んでいた悪い方の腎臓が、腫れが引いて活動し始めたというのです。神様が癒して下さったのです。しかし彼はこう言っています。「私はこのことを声高に口外するつもりはありません。…それを売り物にする気はありません。…癒しだけを期待して神様への信頼が無いなら、それは信仰ではありません。たとえ癒されても、この肉の体は癒された瞬間から朽ちてゆきます。朽ちない神様の言葉を求めるべきです。癒されても癒されなくても、私が主の最善の中で養われ生かされていることに変わりはないからです。」

「朽ちない神様の言葉を求めるべきです。」本当にそうです。また「癒されても癒されなくても、私が主の最善の中で養われ生かされていることに変わりはないからです。」という言葉はいい言葉だと思いました。私は主の最善の中を今日も生かされているんだ、と思いました。それなのに、自分の思い通りにならないと文句を言い、主を疑うことの何と多い事かと反省しました。癒されても、癒されなくても走って伝道する姿は、石を投げられても伝道するパウロの姿と重なります。S 牧師は私がしていることを「狂気」と言いましたが、彼も「狂気」でした。「狂気」の方が面白いです。最近、私から「狂気」が薄れたかもしれません。キリストの為に「狂気」と言われるくらい体を張って伝道する者になりたいと思います。